

ヨシちゃんのこと
ひとりごと



あれ!病院もか!

私が通院している「東山武田病院」が12月20日で閉院になり、跡地に154室ある4階建てのホテルが建築される掲示を見ました。既に府立洛東病院は東山警察署になり、東山で大病院は第一日赤だけになります。

この病院は元は妙法院地所。平重盛の邸宅跡?で積翠園(しゃくすいえん・写真)という名前の大きな庭園があります。戦後の混乱が未だ残っていた1952(昭28)ころ専売公社が購入、「専売病院」建設計画が地域に知らされた。そこは修道小学校の隣地、当時は結核患者の多い時代で地元から「病院建設反対」運動が始まり、19歳だった私も加わっていました。

最終的に「結核専門病棟は造らず庭園は残す」協定条件で専売病院が建設されました。



その病院もタバコ民営化の影響で1953年(平5)専売公社が武田病院に売却しました。

そして今度はその武田病院も閉院です。その後の庭園がどうなるかと病院の方に聞きましたら「地域協定は生きています」と聞き安心、若い時の運動が少しはお役にたったのだと思えました。(外資系らしいので油断は出来ませんが)

新自由主義になつて、企業銀行等々合併が進んで来ました。あれ!病院お前もか!の感じがします。患者も転院等で困りますが、医療に携わっている方々は生活が掛かっているからモット大変でしょう。

文章表現学講座資料から
七条大橋への手紙

「とんからりん」(9月号)に同封したチラシ「七条大橋の自己紹介」が会員で大学の講師をなさっているF先生の授業で取り上げられました。

学生さんに出された課題は「七条大橋に手紙を書く」というものです。先日、先生がその授業のまとめを届けて下さいました。まとめのプリントには20数名の学生さんの返事が載っていました。今回その一部を紹介させていただきます。

七条大橋への手紙

戦争をしない国となった現在では、兵器にとり上げられた欄干や高欄を元通りにし

シゲちゃんのこと

疑問 第3回

時間の長さや
どんなふうに感じて
おられますか?

知り合いのお坊さんが、過ぎてゆく時間の速さについてこんな話を教えてくれました。

- 四十代は準急、
- 五十代は急行、
- 六十代は特急、
- 七十代は新幹線、
- 八十代になると、もうどこにも止まらなくなる。

確かに、年齢を重ねるにつ

てあげたい、とおもいました。しかし、一学生の身の私では、それを実行するだけの力はありません。ただ有志を募ることとはできません。なので、他の方面から100歳の祝いやら

を考えると、七条大橋の歴史を振り返り自分なりにまとめ、それを発信していきたいです。歴史学科1回生にできる精一杯の事が、これくらいしか思いつかないのが歯がゆいのです。(1回生女・A)

七条大橋が100歳を迎えることになったと苦難の道のりを耐えぬいて来たことを知り驚きました。昔は今と違っ

れ、時間はどんどん速くなっていくように思います。

一方で、私にはこんな体験もありました。それは「時間の長さ」についての話です。

二十歳前後の頃、私は「日帝三十六年」(＝戦前に日本が朝鮮を植民地支配した期間)という言葉を聞きました。そのとき、「三十六年」という時間はとてつもなく長い時間だと思えました。自分の生きてきた時間をはるかに超える長さだったからです。

ところが、四十歳を過ぎて韓国で暮らしたとき、改めてこの「三十六年」という言葉を聞いて、「三十六年なら、人生の中に収まるじゃないか」と思えたのです。若い頃のお

て高欄があつたなんて全然知りませんでした。(3回生男・B)

七条大橋の文章が気分悪かったです。押しつけがましく、何より今まで知ることもなく、た人間がこの文章を読んだ時、のことが何一つ考えられていないと感じたからです。「物に託して」自分の意見を書いているあたりも、私個人は受け入れられません。Sさんの文章は、時に良心を押しつけられてる感じがして気味が悪かったです。「京都人としての部

の感覚を覚えていただけに、それはちよつと意外な感じでしたが、五十五歳になった今なら、さらにそのように思えます。

もちろん、日本の植民地支配の期間が短かつたという話ではありません。時間の長さというものが、自分が生きてきた時間の長さによって全く違うものとして感じられる、という話です。

よいいちゃんにはそんな体験はありませんか? 七十代の今、時間の長さや時間の長さについて、どんなふう感じておられるでしょうか? 井上茂樹(文章筆)

幼児の頃、もう幾つ寝るとお正月で日が単位。老人は早や来年と年単位。仰るとおり時間が早く過ぎます。

年令だけでなく何も無い時間も長く感じます。20歳のころ留置・拘置所で12日過ごした時の1日の長かつたことを思い出しました。(注・不起訴)

その後、酒屋の仕事等に従事した57年はダツと、コンピニで年中無休24時間になつて更にスピードアップ。凡人文章は、時に良心を押しつけられ、徒に時の速さに追われて悪かったです。「京都人としての部」が特に!。(1回生男・C)

文中のSが編集後記にお礼を記した娘の子は同じく孫なのに、もう高校生か!という感覚と似ているように思えます。

京都&東山 ぶらりピカリ

31

映画も上映した 南座

この月末から12月26日迄南座で恒例の顔見世が始まる。毎年、劇場正面に勸亭流の文字で出演役者名の描かれた「まねき看板」が掲げられ、劇場関係者がお客様とともに清めの塩をまき、一本締めで大入りを祈願する。テレビ報道でそれを見ると年末気分になる。



南座は元和時代(1603~1615)四條河原に公許された7つの櫓の伝統を今に伝える唯一の劇場。1909年(明39)年松竹の経営になり、1929(昭4)由緒ある櫓を備えた桃山風破風造り更に1981年(平3)大改造されて現在の姿は登録有形文化財になった。

私は酒屋で年末は忙しく顔見世は一度も見たことが無い。歌舞伎や前進座公演を幾度か南座で観劇したが、南座初体験は国民学校五年時代の映画鑑賞だ。役者さんも戦争に動員され「歌舞伎」が出来なくて松竹としても映画上映で凌いだのだから。

見た映画は海軍兵学校を主題にした「轟沈」と言う映画。主題歌になった歌の「月月火

水木金」は今も歌える唱歌の一つ。この歌は訓練が週1回も休めないことを歌詞に入れている。もう一つは1988年に当時戦争の同盟国ドイツで製作されたベルリンオリンピックの記録映画『民族の祭典・美の祭典』の2部作だった。そのベルリンマラソンで当時金メダルを得た孫・銅の南選手やヒットラーの姿に驚喜し拍手した。当時殖民地の朝鮮

市電が走った街 京都を巡る 福田静一



市電四条線が健在

だった昭和四十七年まで、市電の線路は祇園で、北と西へ分岐していました。東山線を北上して、まっすぐ東山線へ向かうのが6系統、左へ折れて四条線へ入るのが、7系統、17系統でした。そして、東山線を南下して、右折して四条線に入る、1系統、20系統もありました。



早朝の四条通、市電が何台も通り過ぎる

韓国出身の二人は日本代表で参加していた。その時代の軍人勅諭・勅語・宮城遙拝等は今の北朝鮮体制と相似性を感じる。「市電の走った街」の南座の写真を見て、ふと65年前の軍国主義教育をうけた幼年時代を思い出した。世界中が戦争放棄する時が来ると信じつつ、南座が歌舞伎や演劇の殿堂であり、平和な日本でもあり続けて欲しい。

この二つの系統は、赤い色の系統板を付けています。京都の市電は、所属する車庫ごとに系統板の地色が区別されており、赤い系統板は、壬生車庫の所属でした。

これから、この1系統の市電に乗り換え、四条線を西へ向かうことにしましょう。1系統は、市の中心部、四条、千本、今出川、東山を循環する系統で、グリーン色の車体に赤い系統板が格好のアクセントになり、エースナンバーの賞禄十分です。

祇園を出ると、そこは祇園の繁華街のど真ん中です。一力茶屋が赤いべんがら色の土塀を残し、今も歴史を秘めて四条通にあります。花見小路は、今は石畳敷きとなり、電柱も地中に埋められ、風情のある通りに改修されましたが、当時は変哲もない通りで、馬券売り場へ向かう無彩色の集団が黙々と歩いている通りでした。

繁華街はなおも続きますが、鴨川から西側の繁華街に比べて明らかに違うのは、いかにも祇園らしい、京都の伝統的な食材や小物などを扱う店が多いことです。

私の思い出は、ちょうど今ごろの早朝、商店がまだシャッターを下ろしているなか、秋の冷気を突き破るようにして市電が駆け抜けていきました。市電がいつもより大きく、存在感のある姿に見えました。

やがて、市電は、四条京阪前に到着です。停留所の北は、京阪電車の四条駅、南側には、南座が控えます。



年末の風物詩、南座のまねき看板の前で



四条京阪前では、京阪電車と平面で交差していた。

た踊りが歌舞伎の発祥と言われ、南座は、四条河原で公認された踊りを舞う劇場として、その伝統を今に伝える唯一の劇場です。明治時代に北側にあった北座もなくなり、南座だけが歌舞伎発祥の現在地に残りました。昭和四年に、由緒ある桃山風破風造りの豪華な劇場を竣工させ、以来京都の代表劇場として多様な演目を取り上げました。

とりわけ京の年中行事となつた歳末の吉例顔見世興行は一度も絶えることなく続けられました。平成三年に、外観はそのままに内部を全面改修し、最新設備の近代劇場として改築されました。

そして、眼前では、警笛の音が聞こえます。そう、ここは、四条線と京阪電車が平面で交差していました。四条線の開通は大正元年、京阪電車は、最初に五条まで開通し、三条まで延長されたのが、大正四年、以来、京阪電車と市電との平面交差が、警笛による警笛で日夜繰り返されてきました。

市電が消え、京阪電車も地下へ潜った四条京阪前、川端通が拡幅され、すっかり様相が変わりましたが、南座や菊水ビルなど、当時の面影を残す建物が残り、四条大橋から見ると、市電時代とほとんど変わっていないのが、いかに京都らしいところですか。

